

■ 第13回県民公開医療シンポジウム

入 場 料
無 (事前申込不要)

「令和」を 健やかに生きよう!

～糖尿病は認知症やサルコペニアにもご用心～

日 時 2019- **8/31** **土** 14:00～16:00
(受付 13時 開場 13時30分)

場 所 北九州国際会議場 メインホール
〒812-0032 北九州市小倉北区浅野3丁目9-30 TEL093-541-5931

定 員 **500名**

プ ロ グ ラ ム

① 開会のことば

公益社団法人福岡県病院協会 会長

九州大学病院 病院長

赤司 浩一

座 長

公益社団法人福岡県病院協会 財務理事

国立病院機構 小倉医療センター 院長

澄井 俊彦

国立病院機構 小倉医療センター

糖尿病・内分泌代謝内科 医長

糖尿病センター長

的場 ゆか

② シンポジウム



講演 1

「高齢者の糖尿病」

北九州市立病院機構 北九州市立医療センター

内分泌代謝・糖尿病内科

主任部長

足立 雅広 先生



講演 2

「認知症と糖尿病」

国立病院機構 小倉医療センター

精神・神経センター長

精神科医長

三浦 智史 先生



講演 3

「サルコペニア・フレイルと糖尿病」

中村学園大学

栄養科学部栄養科学科

教授

河手 久弥 先生

③ 質疑応答

④ 閉会のことば

公益社団法人福岡県病院協会 副会長

国家公務員共済組合連合会

浜の町病院 院長

一宮 仁



主催：公益社団法人福岡県病院協会

後援：福岡県、北九州市、(公社)福岡県医師会、(公社)福岡県薬剤師会、(公社)福岡県看護協会、(公社)福岡県栄養士会、(公社)福岡県診療放射線技師会、(公社)福岡県理学療法士会、(公社)福岡県作業療法協会、(一社)福岡県言語聴覚士会、(一社)福岡県歯科医師会、(一社)福岡県臨床衛生検査技師会、(一社)福岡県私設病院協会、(一社)福岡県精神科病院協会、(一社)福岡県医療法人協会、(一社)福岡県病院薬剤師会、日本糖尿病協会福岡県支部、(公社)北九州市医師会、(一社)北九州市歯科医師会、(一社)遠賀中間医師会、(一社)京都医師会、(公社)豊前築上医師会、西日本新聞社、毎日新聞社、読売新聞西部本社、朝日新聞社、日本経済新聞社西部支社、**NNN北九州放送局**、(株)福岡放送、RKB毎日放送、(株)テレビ西日本、九州朝日放送、TVQ九州放送(順不同)
公益社団法人を(公社)、一般社団法人を(一社)と省略させていただきます。

連絡先 公益社団法人福岡県病院協会

TEL:092-436-2312 FAX:092-436-2313

〒812-0016 福岡市博多区博多駅南2丁目9番30号

福岡県メディカルセンタービル 2階

(公社)福岡県病院協会とは…

昭和25年に設立され、「病院の経営管理の向上を図り、地域医療の普及向上と、県民の健康増進に寄与すること」を目的に、各種教育研修会などを実施しています。会員は、県内の4大学病院など、公私の約250病院が加入しています。

目 次

ご挨拶	・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
	公益社団法人福岡県病院協会 会長 九州大学病院 病院長	赤司 浩一
開催にあたって	・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
	第13回県民公開医療シンポジウム 運営委員長 国立病院機構 小倉医療センター 院長	澄井 俊彦
座 長	国立病院機構 小倉医療センター 院長 国立病院機構 小倉医療センター 糖尿病・内分泌代謝内科 医長 糖尿病センター長	澄井 俊彦 的場 ゆか
講演1	「高齢者の糖尿病」 ・・・・・・・・・・	3
	北九州市立病院機構 北九州市立医療センター 内分泌代謝・糖尿病内科 主任部長	足立 雅広 先生
講演2	「認知症と糖尿病」 ・・・・・・・・・・	7
	国立病院機構 小倉医療センター 精神・神経センター長 精神科医長	三浦 智史 先生
講演3	「サルコペニア・フレイルと糖尿病」 ・・・・・・・・	9
	中村学園大学 栄養科学部栄養科学科 教授	河手 久弥 先生
質疑応答	・・・・・・・・・・・・・・・・・・	11
閉会のことば	公益社団法人福岡県病院協会 副会長 国家公務員共済組合連合会 浜の町病院 院長	一宮 仁

ご 挨拶

公益社団法人 福岡県病院協会

会長 赤 司 浩 一

(九州大学病院 病院長)



本日は、残暑厳しく、また、お忙しい中、「第 13 回県民公開医療シンポジウム」にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

福岡県病院協会は、地域医療の普及向上と県民の皆様の健康増進に寄与することを目的に、1950 年（昭和 25 年）全国に先駆けて設立され、2013 年（平成 25 年）4 月からは公益社団法人として活動しております。

「県民公開医療シンポジウム」は、当協会が公益目的事業の一環として 2007 年（平成 19 年）から毎年県内各地で開催しているものであり、本年度で 13 回目となります。

今回のシンポジウムでは、「令和」を健やかに生きよう！～糖尿病は認知症やサルコペニアにもご用心～をテーマといたしました。益々増加する糖尿病と、高齢社会において無視できない認知症やサルコペニアなどの関連性が指摘されるようになってきた現状を踏まえ、高齢者の方々が健康に日常生活を送ることができるよう、その予防策を知っていただきたいと思います。

本日は、この分野で豊富な経験と高い知見をお持ちの先生方にご講演いただきます。どのお話も、最新の知見に基づく、大変興味深いお話になるものと期待しております。また、講演終了後には、皆様方からのご意見や質問をお受けして先生方がお答えする「質疑応答」の場も設けております。これを機に、健康に対する皆様の理解が深まり、皆様が日常生活を送る上での一助になれば、幸いに存じます。

最後になりますが、当協会は、県民の皆様に医療や医療制度を正しく理解いただけるよう、活動を続けて参ります。今後とも、どうぞよろしくお願い致します。

開催にあたって

第13回県民公開医療シンポジウム運営委員長

独立行政法人国立病院機構 小倉医療センター

院長 澄井俊彦



本日は、第13回県民公開医療シンポジウムにご参加いただきありがとうございます。このシンポジウムは県民の皆様に正しい医療情報を提供することを目的に、毎年1回、福岡県病院協会が開催しています。今年は、北九州地区で開催することになり、そのテーマを何にするかは少し悩みました。現在の日本の医療界は、大きな変革期にあります。それは、皆様もよくご存知のとおり「異次元の高齢化社会」に突入したという事実です。そして、北九州市は特に高齢化率が高いということを考えると、やはり、ご高齢の方々に新しく始まった令和を健やかに生活してもらえることに主眼を置くこととしました。

私は、膵臓が専門で、膵炎や膵がんなどと共に糖尿病も診療してきましたが、膵がんも糖尿病も、共通していることは、患者さんは増え続け、かつ高齢化してきたことです。そして、日常の診療を思い起こすと、ある事が頭に浮かんできました。それは、診察室に入って来られる時の姿です。元気に歩いて入って来られる人のほかに、腰や膝が痛そうな歩き方の人、杖歩行の人、手押し車の人など、いわゆるサルコペニアという状況にある方が多いということです。そして、物忘れと認知症は厳密には違いますが、認知症の主な症状である物忘れを訴えられる患者さんが多くなったということです。

最近では、認知症やサルコペニアが糖尿病と密接な関わりがあるという知見が次々と報告されています。サルコペニアという概念をご存じない方もいらっしゃると思います。そこで、今回は、高齢者の糖尿病を中心に、認知症とサルコペニアを交えたシンポジウムを企画し、診療経験も豊富で、その内容を分かりやすく、面白く、皆様の役に立つようなご講演をしていただける3名の講師の先生を厳選しました。

夏の暑い中にわざわざ本シンポジウムに足をお運びになられたのですから、今後、明るく楽しく生活が出来るような参考にしていただける何かを学んでもらえることを願って、運営委員長としてのご挨拶とさせていただきます。

「令和」を健やかに生きよう！

～糖尿病は認知症やサルコペニアにもご用心～

座 長

国立病院機構 小倉医療センター 院長

澄井 俊彦

国立病院機構 小倉医療センター
糖尿病・内分泌代謝内科 医長
糖尿病センター長

的場 ゆか

高齢者の糖尿病

北九州市立病院機構 北九州市立医療センター
内分泌代謝・糖尿病内科 主任部長

足立 雅広 先生



世界で糖尿病人口は急増しています。我が国においても同様であり、平成 28 年国民健康・栄養調査の結果、「糖尿病が強く疑われる者」が約 1,000 万人、「糖尿病の可能性が否定できない者」は約 1,000 万人と推計されています。日本の糖尿病人口の特徴として、高齢者の割合が多いことです。同調査では、「糖尿病が強く疑われる者」の有病率は、60 歳代で、男性 21.8%、女性 12.0%、70 歳以上で、男性 23.2%、女性 16.8%と、加齢に伴い、糖尿病の有病率は高くなっています。加齢により糖尿病が増える原因として、加齢に伴う膵臓からのインスリン分泌の低下と、筋肉量の低下、内臓脂肪の増加、身体活動の低下に伴うインスリン抵抗性の増加が考えられます。

高齢者の糖尿病は、一般に 65 歳以上の糖尿病を指しますが、若い人の糖尿病と異なる特徴が顕著になるのは、75 歳以上の後期高齢者の糖尿病です。フレイルや認知症などの老年症候群は、高齢者糖尿病の中でも 75 歳以上あるいは 80 歳以上で起こりやすくなります。個人差はありますが、65 歳になると、中年期や、壮年期での糖尿病に対する考え方や治療法を徐々に転換していく必要があります。

高齢者糖尿病の特徴として、注意すべき点は、(1) 食後の高血糖をきたしやすい、逆に夜間、早朝時は血糖が下がりやすい。(2) 脳梗塞や狭心症など動脈硬化疾患を合併している場合が多く、自覚症状がない場合が多い。(3) フレイル、サルコペニア、認知症、うつ病、低栄養、骨粗鬆症、転倒などの老年症候群をきたしやすい。(4) 腎機能など生理機能の低下のため、薬の副作用が起こりやすい。(5) 高血糖や、低血糖の時、典型的な症状がでにくい。(6) 身体能力や認知能力において個人差が大きい、などが考えられます。

高齢者糖尿病は、加齢や糖尿病に加え、高血圧症、脂質異常症などの罹患歴が長いこともあり、網膜症や腎症などの細小血管合併症や、脳梗塞、狭心症などの大血管合併症を合併している場合が多くなっています。最近、高齢者において、糖尿病があると、食事をしたり、服を着替えるなどの日常生活動作の障害を招いたり、認知症、うつ病、

フレイル、サルコペニア、転倒、歯周病などのいわゆる老年症候群を発症・進展させることがわかってきました。今まで通り血管合併症を予防するために、血糖、血圧や脂質を管理することに加えて、老年症候群の予防も重要になってきます。平均血糖が高すぎても、また低すぎても、フレイルや認知症などの老年症候群を発症する頻度が高くなると言われています。

フレイル、サルコペニアなどの老年症候群の予防の基本は食事療法と運動療法です。メタボリック症候群の糖尿病の食事療法では、摂取カロリーを守ることに重点がおかれていますが、75歳以降は、低栄養やサルコペニアを予防するために、極端なエネルギー制限を避けるとともに、腎機能に注意しながら、ロイシンなどの必須アミノ酸を中心としたタンパク質を十分に摂取することが重要です。すなわち、65歳頃から一人一人身体状況に応じて、食事療法を見直す必要があります。

運動療法に関しても、生活習慣病の運動療法は、有酸素運動が基本でしたが、有酸素運動、レジスタンス運動、バランス運動など多要素の運動を組み合わせることが推奨されています。

また、糖尿病と、ある種のがんの発症との関係も報告されています。糖尿病になりやすい食事や生活習慣ががんの発症にも関係しているという報告もあります。がんの早期発見のためには、がん検診など、定期的な検査を受けることが大切です。

最近、糖尿病治療中の患者さんに関して、低血糖を回避する重要性が強調されています。低血糖、とくに重症低血糖は、血管の障害や、交感神経の緊張により、心血管病障害を招くと考えられます。また、特に、高齢者において、低血糖は、フレイル、認知機能障害、うつ病、転倒、転倒による骨折を起こすことがわかってきました。

高齢者は、自律神経の低下により、頻脈、発汗、振戦などの低血糖時の典型的な症状が出にくいため、本人が気がつかないことがあります。話が不明瞭になる、転倒しやすくなるなどの症状が出ることもあり、家族や介護者が、低血糖に気付くことも大切です。

高齢者糖尿病の特徴を考慮し、高齢者糖尿病診療ガイドライン 2017 では、低血糖を避けるために、インスリンやスルホニル尿素（SU）薬、グリニド薬にて治療している場合、目標とする HbA1c 値が高く設定され、さらに、下限値が設けられ、血糖の下げ過ぎに注意するようになりました。また、糖尿病の治療は一律なものではなく、合併症の有無、身体能力や生活環境に応じて、一人一人違った糖尿病の治療や HbA1c の目標値を設定する、個人重視の糖尿病治療の重要性が強調されてきています。

糖尿病治療の薬剤は、加齢に伴い体内での代謝や排泄が低下するため、重症低血糖、転倒・骨折、体重増加、脱水、低栄養、サルコペニアなどの副作用が起こりやすくなります。糖尿病や高血圧症など複数の慢性疾患に対して薬が処方されていることが多く、容易に多剤併用（ポリファーマシー）になります。ポリファーマシーは、薬の飲み忘れや飲み間違いの原因となるだけでなく、薬物の有害事象や転倒の頻度が増えるため、

定期的に薬の内容や飲み方を見直してもらう必要があります。現在、医師、看護師、薬剤師など多種職が連携して、ポリファーマシーを改善する取り組みが広がっています。

糖尿病治療中に、発熱、下痢、嘔吐、食欲不振のため、食事ができなくなる、いわゆるシックデイの際は、高齢者は脱水になりやすいため、水分補給と消化のよい炭水化物を摂取することが必要です。内服薬、インスリンの減量・中止については、事前に主治医と相談しておくことが勧められます。

高齢の糖尿病患者さんは、血糖値やHbA1c値だけを気にするのではなく、サルコペニアや骨粗鬆症などの老年症候群の予防を毎日心がけ、幸福感や生きがいを大切にして毎日生活することが、日常生活の質の向上と、健康長寿を得るための秘訣だと考えています。

略 歴

1992年 九州大学医学部卒業、九州大学第三内科（現 病態制御内科）入局
2002年 米国NIH, NCI, Laboratory of Metabolism 客員研究員
2005年 九州大学 老年医学 特任助教
2009年 九州大学 内分泌代謝糖尿病内科 助教
2013年 国立病院機構小倉医療センター 糖尿病内分泌代謝内科 医長
2015年 JCHO九州病院 内分泌代謝内科 医長
2018年 北九州市立医療センター 内分泌代謝・糖尿病内科 主任部長

資 格

医学博士

日本内科学会 総合内科専門医 指導医

日本糖尿病学会 専門医 研修指導医

日本内分泌学会 専門医 指導医 評議員 九州支部評議員

日本老年医学会 老年病専門医 指導医 代議員

日本肥満学会 専門医 指導医

日本骨粗鬆症学会 認定医

認知症と糖尿病

国立病院機構 小倉医療センター
精神・神経センター長 精神科医長
三浦 智史 先生



認知症とは、脳血管疾患やアルツハイマー型認知症などによる脳の病変のために、記憶や会話能力、実行機能などの一旦発達した認知機能が、持続的に障害されて、日常の社会生活に支障をきたすようになった状態のことを言います。認知機能低下による、記憶障害や見当識障害、実行機能障害などの中核症状に加え、不眠やうつ、意欲低下、不穏、興奮、幻覚、妄想といった周辺症状を伴っていることもあり、家族や周りの人にとっては、介護する上で、大きな負担となることがあります。

認知症には、さまざまなタイプがあります。我が国で最も頻度が高いのは、アルツハイマー型認知症で、およそ 60～70% を占めています。次に多いのが、血管性認知症で約 20% です。その他、頻度はより低いのですが、特徴的な症状が見られるレビー小体型認知症や前頭葉側頭葉変性症などがあります

一般的に認知症は、高齢になるほど頻度が高くなることがわかっています。我が国の総人口は、平成 28 年現在で 1 億 3 千万人弱であり、そのうち 65 歳以上の高齢者は、およそ 3,500 万人と全体の 27.3% を占めていました。平成 24 年の調査では、そのうち、約 15% が認知症でした。今後は、総人口が減ることにより、2065 年には、65 歳以上の高齢者が約 2.6 人に 1 人、75 歳以上のいわゆる後期高齢者が、約 4 人に 1 人となることが予想されています。そして、2060 年には、高齢者の約 4 人に 1 人が、認知症になると予想されています。

残念ながら今のところ、認知症を予防したり、完全に治す薬はありません。アルツハイマー型認知症とレビー小体型認知症で効果が確認された、進行を遅くする薬が 4 種類発売されているだけです。しかし、認知症を予防する方法について、世界中で多くの研究者が盛んに研究しています。はじめは認知症になる前の段階である軽度認知障害（MCI）の段階で治療を行うことで、認知症を予防できるのではないかと考えられていました。いろんな試みがなされましたが、どれも結果としてはうまくいきませんでした。その理由の一つは、まだ物忘れが全く見られない 50 歳頃から、脳の中では、

少しずつ将来の認知症につながる変化が起きているためだと、最近わかってきました。そこで、現在は、より若い時期から認知症を予防する方法について研究が始まっています。近い将来には、認知症を予防する方法が明らかになるかもしれません。

では、今のところ認知症にならないためにできることはないのでしょうか？いいえ、そんなことはありません。これまでの研究で、認知症になりやすくなる要因や、逆に認知症を予防する要因が明らかとなっています。社会参加を続けて、周囲の人との対人関係ネットワークを維持し、適度な運動習慣を持つことは認知症を予防すると言われています。逆に、高齢者のうつ症状や、高血圧、脂質代謝異常、そして糖尿病は、認知症を発症する危険因子と言われています。禁煙をして、バランスの良い食事を取り、アルコール摂取を制限し、適度な運動を行なって、必要であれば体重を調整するなど、認知症になりにくい生活習慣を身につけることを心がけましょう。

略 歴

平成6年3月	九州大学医学部卒業、九州大学麻酔科蘇生科入局
平成8年6月	九州大学精神科神経科入局
平成17年5月	九州大学大学院医学研究院 精神病態医学分野 助教
平成18年1月	九州大学大学院医学系学府博士課程 修了
平成18年11月	米国メイヨークリニック 神経薬理学 研究員
平成21年4月	九州大学大学病院 助教
平成28年6月	同 講師
平成29年7月	国立病院機構小倉医療センター 精神科医長 現在に至る

講演 3

サルコペニア・フレイルと糖尿病

中村学園大学
栄養科学部栄養科学科 教授
河手 久弥 先生



サルコペニア（筋肉減少症）は、加齢や病気が原因で筋肉量が減少し、筋力や身体機能が低下している状態のことをいいます。超高齢社会が進行する中で、サルコペニアの人の割合は、今後さらに増えることが予想されています。一方、フレイルは要介護に至る前段階と位置付けられ、身体的要因だけでなく、精神・心理的要因（認知症、うつなど）や社会的要因（独居、経済的困窮など）も含む概念です。サルコペニアやフレイルは、高齢者の身体機能障害のリスク因子であり、要介護状態や死の転帰に陥りやすいことが知られています。サルコペニアを診断するには、まず握力・歩行速度を測定します。どちらか一方でも低下している場合には、骨格筋量を測定し、骨格筋量の減少を認める場合にサルコペニアと診断されます。また、サルコペニアの簡単なスクリーニング検査としては、「指輪つかテスト」が用いられています。フレイルに関しては、現時点で統一された診断基準はなく、今後の策定が期待されています。

サルコペニアやフレイルは、糖尿病などの生活習慣病の進行にも関与しています。食事で糖質を取った後は、一時的に血糖値が上昇しますが、膵臓から分泌されるインスリンの働きで、血糖の約 80% は筋肉に取り込まれるため、血糖値はすぐに正常範囲に戻ります。ところが、サルコペニアで筋肉量が減少している人は、糖が取り込まれる場所が少なくなるために、血糖値（特に食後血糖値）が上昇したまま、糖尿病を発症することになります。また、サルコペニアやフレイルにおける身体活動量の低下も血糖値上昇に繋がります。

サルコペニアやフレイルは加齢に伴って進行しますが、早期に適切な介入（栄養療法と運動療法の併用）を行うことにより、その進行を遅らせて健康寿命の延伸に繋がることが期待されます。運動面では、有酸素運動と筋力トレーニングの併用が効果的とされています。栄養面では、適切なエネルギー摂取、十分なたんぱく質（特にロイシンなどの分岐鎖アミノ酸）の摂取、ビタミン D の摂取（あるいは日光浴）などが推奨されています。

略 歴

1989 年 3 月 九州大学医学部医学科卒業
1989 年 6 月 九州大学病院 第三内科（現 病態制御内科学）研修医
1990 年 6 月 国立別府病院（現：別府医療センター）内科研修医
1996 年 4 月 九州大学生体防御医学研究所 非常勤研究員
1998 年 6 月 米国ワシントン大学医学部病理学ポスドクトラルフェロー
2001 年 5 月 九州大学大学院医学研究院 老年医学 助手
2007 年 9 月 九州大学病院 内分泌代謝・糖尿病内科 助教
2012 年 11 月 九州大学医学部 講師（併任）
2015 年 4 月 中村学園大学栄養科学部栄養科学科 解剖生理学 教授
2018 年 4 月 中村学園大学栄養科学部 学部長補佐

所属学会

日本内科学会（認定医、総合内科専門医）
日本内分泌学会（専門医、指導医、評議員）
日本老年医学会（代議員）
日本骨粗鬆症学会（認定医）
日本病態栄養学会（学術評議員）
日本糖尿病学会、日本分子生物学会
日本ステロイドホルモン学会
日本生理学会
日本サルコペニア・フレイル学会
The Endocrine Society（米国内分泌学会）

国家公務員共済組合連合会

浜の町病院

病院長 一宮 仁



〒八一〇―八五三九
福岡市中央区長浜3丁目3番1号
電話 (〇九二)―七二一―〇八三一
FAX (〇九二)―七二四―三二六二
E-mail info@hamanomachi.jp
URL <https://www.hamanomachi.jp>

九州大学病院

病院長 赤司 浩一

〒八一二―八五八二
福岡市東区馬出3丁目1番1号
電話 (〇九二)―六四一―一一五一(代表)
FAX (〇九二)―六四二―五〇〇八
URL <http://www.hosp.kyushu-u.ac.jp>

飯塚病院

院長 増本 陽秀

〒八二〇―八五〇五
飯塚市芳雄町3番83号
電話 (〇九四八)―二九―八〇一〇
FAX (〇九四八)―二九―五七四四
URL <http://aih-net.com>

独立行政法人 国立病院機構

小倉医療センター

院長 澄井 俊彦



〒八〇二―八五三三
北九州市小倉南区春ヶ丘10番1号
電話 (〇九三)―九二一―八八八一
FAX (〇九三)―九二二―五〇七二
URL <https://kokura.hosp.go.jp/>



〒八二一〇〇五三
福岡市東区箱崎7丁目7-27
電話 (〇九二) 六三二 一三三三
FAX (〇九二) 六三二 一三三〇
URL <http://www.kaizuka-hosp.or.jp/>

理事長 庄司 哲也

医療法人
貝塚病院



〒八三三八五八八
福岡市東区青葉6丁目40-8
電話 (〇九二) 六九一 一三八八一
FAX (〇九二) 六九一 一〇五九
E-mail info@haradoi-hospital.com
URL <https://haradoi-hospital.com>

院長 小柳 左門
原土井病院

公立八女総合病院企業団

公立八女総合病院

企業長 平城 守

〒834-0034 福岡県八女市高塚 540 番地 2
電話(0943)23-4131 FAX(0943)22-3185

みどりの杜病院

院長 原口 勝

〒834-0051 福岡県八女市立野 362 番地 1
電話(0943)23-0002 FAX(0943)23-0012

介護老人保健施設 回寿苑

施設長 須古 治男

〒834-1215 福岡県八女市黒木町湯辺田 270 番地
電話(0943)42-3131 FAX(0943)42-3111

公立八女総合病院企業団ホームページ
はこちらの QR コードからご覧ください。



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

〒八一五 一八五五五
福岡市南区大楠3丁目1番1号
電話 (〇九二) 五二一 一三二一
FAX (〇九二) 五二二 一三〇六
URL <https://www.fukuoka-med.jrc.or.jp>

院長 寺坂 禮治
福岡赤十字病院



社会福祉法人 賜財 済生会支部

福岡県済生会二日市病院

院長 間野 正 衛

〒八一一一八五一六

筑紫野市湯町三丁目13番1号

電話 (〇九二)―九二三―一五五一

FAX (〇九二)―九二四―五二一〇

E-mail info@saiseikai-futsukaichi.org

URL <http://www.saiseikai-futsukaichi.org>

内科・精神科・心療内科
医療法人社団 益豊会

今宿病院

理事長
院長

深堀 元 文

〒八一九一〇一六七

福岡市西区今宿2丁目12番7号

電話 (〇九二)―八〇六―〇〇七〇

FAX (〇九二)―八〇六―四四一七

E-mail info@imajuku-hospital.gr.jp

医療法人社団 水光会

宗像水光会総合病院

理事長 津留 英 智

院長 田山 慶一郎

〒八一一一三二九八

福岡市日蒔野5丁目7番地の一

電話 (〇九四〇)―三四―三一一一

FAX (〇九四〇)―四三―五九八一

E-mail hosp@suikokai.or.jp

URL <http://www.suikokai.or.jp>



医療法人社団 江頭会

さくら病院

理事長
院長

江頭 啓 介

〒八一四一〇一四三

福岡市城南區南片江6丁目2番32号

電話 (〇九二)―八六四―一二一二

FAX (〇九二)―八六五―四五七〇

E-mail info@sakurahp.or.jp

URL <http://www.sakurahp.or.jp/>

独立行政法人 国立病院機構

福岡東医療センター

院長 江崎 卓弘

〒八一一―三二九五

古賀市千鳥1丁目1番1号

電話 (〇九二)―九四三―二三三一

FAX (〇九二)―九四三―八七七五

E-mail 605-shomu@mail.hosp.go.jp

URL <https://fukuokaeh.hosp.go.jp/>

福岡県立精神医療センター 太宰府病院

院長 小嶋 享二



〒八一八―〇一二五

太宰府市五条3丁目8番1号

電話 (〇九二)―九二二―三三三七

FAX (〇九二)―九二四―四〇六〇

E-mail info@dazaifu-hsp.jp

URL <http://www.dazaifu-hsp.jp>



地方独立行政法人 福岡市立病院機構

福岡市民病院

院長 桑野 博行

〒八一二―〇〇四六

福岡市博多区吉塚本町13番1号

電話 (〇九二)―六三二―一一一一

FAX (〇九二)―六三二―〇九〇〇

E-mail shiminbyoin@fcho.jp

URL <http://www.fcho.jp/shiminhp/>



社会福祉法人 賜財済生会 済生会福岡総合病院

地域がん診療連携拠点病院・地域医療支援病院・救命救急センター

院長 松浦 弘

〒八一〇―〇〇〇一

福岡市中央区天神1丁目3番46号

電話 (〇九二)―七七一―八一五一

FAX (〇九二)―七一六―〇一八五

E-mail byoin@saiseikai-hp.chuo.fukuoka.jp

URL <https://www.saiseikai-hp.chuo.fukuoka.jp>

地方独立行政法人 福岡市立病院機構

福岡市立こども病院

院長 原 寿 郎

〒八二一〇〇一七

福岡市東区香椎照葉5丁目1番1号

電話 (〇九二)一六八二一七〇〇〇

FAX (〇九二)一六八二一七三〇〇

E-mail f-kodomo@fcho.jp

URL <http://www.fcho.jp/childnp/>

国家公務員共済組合連合会

新小倉病院

病院長 渋谷 恒 文

〒八〇三一八五〇五

北九州市小倉北区金田1丁目3番1号

電話 (〇九三)一五七一・一〇三一

FAX (〇九三)一五九一・一〇五五三

E-mail tkr-shinkokura@shin-kokura.gr.jp

URL <http://www.shin-kokura.gr.jp/>



一般社団法人 福岡県社会保険医療協会

社会保険田川病院

病院長 田 中 裕 穂

地域医療支援病院

地域がん診療連携拠点病院

〒八二六一〇〇二三

田川市上本町10番18号

電話 (〇九四七)一四四一・〇四六〇

FAX (〇九四七)一四五一・六五四〇

E-mail syomuka@s-tagawa-hp.tagawa.fukuoka.jp

URL <http://www.s-tagawa-hp.tagawa.fukuoka.jp/>



地域医療支援病院
日本医療機能評価機構認定病院

宗像医師会病院

院長 伊 東 裕 幸

〒八一一一三四三一

宗像市田熊五丁目5番3号

電話 (〇九四〇)一三七一・一一八八

FAX (〇九四〇)一三七一・〇〇一六

URL <http://www.mmah.jp>



公立学校共済組合

九州中央病院

病院長 前原 喜彦



〒八二一八五八八

福岡市南区塩原三丁目23番1号

電話 (〇九二)一五四一・四九三六

FAX (〇九二)一五四一・四五四〇

URL <http://kyushu-ctr-hsp.com/>

医療法人ユーアイ

西野病院

理事長
院長 西野 豊彦

〒八二〇一〇二〇六

福岡県嘉麻市鴨生532番地

電話 (〇九四八)一四二一・一一一四

FAX (〇九四八)一四二一・四七九〇

地方独立行政法人北九州市立病院機構

北九州市立医療センター

理事長 中西 洋一
院長 中野 徹



〒八〇二一八五六一

北九州市小倉北区馬借二丁目1番1号

電話 (〇九三)一五四一・一八三一

FAX (〇九三)一五三三・一八六九三

E-mail byou-iryu-kanri@kitakyu-cho.jp

URL <https://www.kitakyu-cho.jp/center/>

一般社団法人 福岡県社会保険医療協会

社会保険仲原病院

病院長 岡嶋 泰一郎

〒八一一一二三三三

糟屋郡志免町別府北2丁目12番1号

電話 (〇九二)一六二一・二八〇二

FAX (〇九二)一六二三・二二四七

E-mail nhp-jimu1@nakabaru-hp.jp

URL <http://nakabaru-hp.jp/>



聖マリア病院

理事長 井手 義雄

病院長 島 弘志

〒830-8543 福岡県久留米市津福本町 422 番地
電話 (0942)35-3322 FAX (0942)34-3115

聖マリアヘルスケアセンター

理事長 井手 義雄

病院長 井手 睦

〒830-0047 福岡県久留米市津福本町 448 番 5
電話 (0942)35-5522 FAX (0942)34-3306



社会医療法人 雪の聖母会

早良病院

院長

梅野 守男

〒819-0002 福岡市西区姪浜二丁目2番50号
電話 (092)1881-0536
FAX (092)1883-8761
URL <http://www.sawara-hp.jp>

医療法人 原三信病院

理事長

平 祐二

院長

原 直彦

〒812-0033 福岡市博多区大博町1番8号
電話 (092)1291-3434
FAX (092)1291-3424
URL <http://www.harasanshin.or.jp/>



公益社団法人
福岡県病院協会